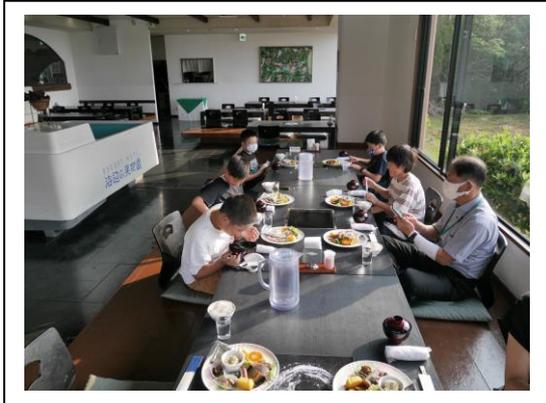


デジャブと デジャブのデジャブ



目を覚ましてカーテンを開けると、プール脇に生えた芝生の緑が鮮やかに、その先に広がる太平洋のブルーと相まって、窓枠の額縁に納まった絵画のようであった。

修学旅行2日目。さすが南国土佐高知である。6時を過ぎたばかりなのに、真っ直ぐな日差しが目に突き刺さる。

身支度や荷物の整理を終えて、7時から朝食をとった。

優しそうなホテルの係の人が、「こちらにどうぞ。」

と言って、窓際の海が見える席に案内してくれた。細やかな配慮がありがたく、心が温かくなる。

いや、心だけでなく体さえも温かくなっていくような気がした。目の前で食べているK大くんの頭を見ると、短髪の間隙から見える地肌に、無数の水滴のような汗がういていた。そのうち、それは互いに寄り集まり、首のあたりまで届く幾筋もの流れとなった。



さすがは南国土佐高知。恐れ入るのである。

K大くんの正面には海を望む開放的なガラス窓がはめこまれ、そこから強烈な日光が差し込み、全身でその恩恵を受けているのだ。心優しき彼は、ホテルの心遣いをおもんばかってか、「暑い」の一言も言わず、黙々と朝食に向かい続けた。





その時である。

「ガタッ」

と音がするので、前を向くと

それは“デジャブ”既視感であった。



昨日、高知城を見学した後、「かつお船」というところで昼ご飯を食べた。教頭先生から「食事を写真に撮って送れ」という指令を密かに受けていたので、周囲を伺いながら密かに写真を撮っていると、隣で「ガタッ」という音がした。見ると、汁椀がひっくり返って中身がテーブルの上にこぼれていた。

そして、そこには大変なことをしでかしてしまったというように、恐縮しながら黙々とおしぼりでこぼれた汁を拭き取っているK大くんがいた。

あまりに申し訳なさそうな姿に、K大くんの誠実さがにじみでている。

森本先生が「だいじょうぶだからね。」と、声をかけた。



昨日は隣で、今朝は目の前という違いはあるが、海の見える窓際のテーブルには、こぼした汁をふくK大くんがいた。

「だいじょうぶ。気にすることはない。」

3ヶ月前に鍋をひっくり返してやけどをし、未だに包帯を巻いた自分の左腕を見ながら、デジャブのそのまたデジャブを感じるのであった。「時よ戻れ。」

なにとはもあれ、K大くんは心優しい誠実な人なのです。

<次号、最終号へ続く>